

四手井綱英先生へのお別れの辞

関西自然保護機構会長 石 井 実

本会の設立にご尽力され、初代会長を務められた四手井綱英先生（京都大学・京都府立大学名誉教授）が昨年（2009年）11月26日に肺炎のため、97歳で永眠されました。

先生は1911年11月30日に京都市内でお生まれになり、1937年に京都帝国大学農学部林学科をご卒業後、山林局（現・林野庁）にご入局、1946年には国立林業試験場（雪害研究室）に移られ、1954年に京都大学農学部（林学科）教授に就任されました。1975年に京都大学を定年退官された後も、日本モンキーセンター所長（1978～1980年）、京都府立大学長（1980～1986年）などをご歴任されました。この間、先生は京都大学の学士山岳会長を務められ、日中合同によるナムナニ峰の学術登山や京大ヒマラヤ遠征隊を支援されています。

四手井先生は常に時代の一步先を歩んでおられ、京都大学の教授時代には、「造林学の基礎は生態学」とのお考えから、1963年に所属する講座の名称を林学第三講座から森林生態学講座に改称されました。また、1970年代には「里山」という用語あるいは概念を、肥料や薪、軽便な木材などを農家に供給する丘陵地の農用林の呼称として定義・提唱されました。今日、里山の自然環境保全は、わが国の生物多様性保全を考えるうえでの最重要課題のひとつと位置づけられるようになっています。また、今秋、名古屋市で開催される生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）では、日本政府は「里山イニシアティブ」を世界に発信し、

地域の生物多様性保全における二次的自然の持続的利用の大切さをアピールすることです。

本会は1978年に創立されましたが、四手井先生はその際に中心的な役割を果たされました。わが国で自然保護運動が盛んになった1960年代、関西には日本自然保護協会の支部があり、その中心におられたのが四手井先生でした。この日本自然保護協会関西支部が先生のご尽力により、1978年に関西自然保護機構に改組されたのです。先生は、その設立の基金集めのために、自らいくつかの企業を回られました。その後、先生は初代会長に就任され、1995年まで18年の長きにわたり、会長として本会を率いてこられました。

四手井先生は、1995年に第3回「松下幸之助花の万博記念賞」を受賞されました。これは先生が、国内外での調査研究を通じて森林と積雪の関係や森林生態系の物質循環の解明にご貢献され、国際的な評価を得られるとともに、森林管理、自然保護の指導と実践にご尽力されたご功績によるものですが、先生はその副賞の一部を本会にご寄付されました。本会では、その基金を元に「四手井綱英記念賞」を設け、本会の会報に掲載された優秀な論文の著者に贈呈してまいりました。

四手井先生は、本会の会報に多くの原稿を寄せられています。会長を退かれた後も、会報に「山科からの手紙」と副題のついた刺激的な随筆を投稿され、会員に示唆と勇気を与え続けてこられました。2007年2月発行の28巻2号に寄せられ

た最後の「山科からの手紙」は「カシノナガキクイムシによるナラ枯れ害」と題するもので、数十年前に遭遇されたナラ枯れが、近年、再び拡大していることを憂いておられました。ナラ林の未来と研究推進を強く訴えておられるその論考から、先生の自然に対する鋭く、温かいまなざしが感じられました。

一昨年、本会は大阪自然史センターの傘下に入

り、新たな枠組みでの歩みを始めました。体制は変わりましたが、本会は、先生がこの会を設立された時の自然保護への熱い想いを決して忘れることはありません。

四手井先生の長きにわたる本会へのご貢献とご指導に感謝しつつ、慎んで先生のご冥福をお祈りします。